中日新聞が統廃合を連載

「誰のための再編か ～県立高校の未来～」

９月16日から３日間、中日新聞が「上」「中」「下」の連載記事を載せています。テーマは「誰のための再編か～県立高校の未来～」。この記事は、幅広い取材と突っ込んだ分析で統廃合の根拠を検証し読者を引きつけます。相当多くの県民に読まれ、県に衝撃を与えている模様です。ある副校長は、増刷りして全教職員の机の上に配布しました。以下、記事を抜粋して紹介します。

生徒減の波が終わった今、何故再編か

「上」では、生徒数の減少に焦点が当たっています。

「小規模校だからと言う理由だけで、つぶして欲しくない」。愛知高(愛荘町)を抱える村西町長が語気を強める。生徒の減少について県教委は「多くの県民が理解してくれている」と自信を見せる。しかしだ。地元市町や保護者等が納得できないのは、2011～2023年度の減少はゆるやかだと言うことだ。今年３月の入試で定員割れは１校のみ。生徒減の大きな波が終わり、安定期に入った今、何故再編なのか。県教委は「減少は減少だ。今後ももっと減少するだろう」と説明するが、学校関係者は「すぐに再編は拙速」と指摘する。愛知高に長女を通わせる母親(45歳)は涙目になって訴えた。「時代のしわ寄せは、いつも過疎地が引き受ける」。次世代を担う子どもを地域で育て、過疎をくい止める地域のシンボルとしての高校を生かす気概は県や県教委からは伝わってこない。

なぜ「4～8学級」でなく「6～8学級」なのか

「中」では、適正規模「４～８学級」が「６～８学級」になった経過とねらいを検証しています。

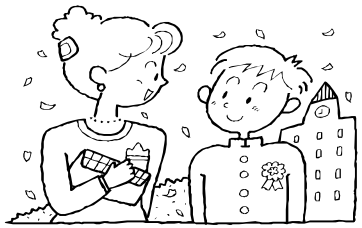
「４～８学級が妥当」としたのは29県、「６～８学級」は10府県だ。県内で６学級を満たしていないのは25校にのぼる。県立高校教職員組合や小規模校の関係者は「最低学級数を４から６に引き上げることで、再編計画を策定しやすくする枠組みをつくった」と批判する。１学年当たり11学級の膳所高。３年の女子生徒(17歳)は「学校ではそれぞれグループみたいなものができていて、一度も話したことのない同級生もいる。先生もたくさんいるが好きな先生とだけ相談する」と明かす。１学年５学級の長浜高校を卒業した女性(21歳)は「…小規模の学校で良かった。１人ひとりの名前と顔が一致し、同級生が何処で何をしているか分かる」。なぜ「４～８学級」でなく「６～８学級」なのか。県民にくり返し説明する姿勢が求められている。

高校生1人あたり 滋賀99万円 大分は217万円

「下」では、教育予算を検証しています。

教育費を全日制高校の生徒１人に換算すると、09年度は99万２千円。全国トップだった大分県の217万３千円と比べると、2.2倍の開きがある。文科省の担当者は「滋賀は毎年40位以下のようです」と話した。

県教委は、大規模の良さをＰＲするが、小規模の良さは積極的には語らない。小規模校では切磋琢磨する環境はできないのだろうか。十把ひとからげに大規模校に再編していくのではなく、地元住民、生徒の声に耳を傾ける姿勢こそ県民は求めている。



県は、この検証に答える必要があります。

高校統廃合はストップせよ

速報 第１９号 2010/09/29 **発行：滋賀高教組**

(増し刷りして全教職員に配布し、また掲示板に貼るなどして下さい)